

## 伊勢物語の章段配列に関する一考察：助動詞の用法から

遠藤, 康子  
純心女子学園教諭

<https://doi.org/10.15017/12353>

---

出版情報：語文研究. 6/7, pp.20-28, 1957-12-30. 九州大学国語国文学会  
バージョン：  
権利関係：

# 伊勢物語の章段配列に関する一考察

——助動詞の用法から——

(その二)

遠 藤 康 子

伊勢物語、全一二五段の章段配列に加えられている作者（もしくは作者群）の意図性については、従来、その話柄の内容、主人公とみなされている「むかし男」の年令、舞台となっている地方、章段の長短等の諸方面から既に説明されている。今「物語の祖」といわれるこの歌物語の章段配列上の意図性、類聚性を、各章段中に用いられている助動詞や助詞の用法から証明してみよう。

古く橘守部が「伊勢物語箋」の提要に「わざとおなじにてをはをかさねてかけることあり」と述べて以来、伊勢物語においては、ある特定の助詞や助動詞が、特定の章段や特定の文章に集中的に用いられているという事は一般に注目されている。

伊勢物語の中には、地の文に延一二七九、和歌に延四一八、延数合計一六九七の助動詞が用いられている。この一六九七の助動詞の分布表を作ってみると、同一章段もしくは

は配列上近接した章段の中に、同じ助動詞が多用されている事実を明らかに認める事が出来る。この事実は、直接的に章段の長短と関連性を有する。一般に長い章段には多数の助動詞が、短い章段には少数の助動詞が用いられるのは当然の事である。しかし、伊勢物語の各章段中の助動詞の分布は、かかる数値的な一般論によって不問に附す事が出来ないほどの集中性を見せているのである。

この事実から、次の二つの疑いが生じる。

第一は、伊勢物語が各地方に残っていた数個の説話群をとりまとめて一つの物語の形態を構成しているものではないかという疑いである。この場合、各地方の説話群には、その地方の方言的な言語表現がおのずから残っているであろう。とすれば、ある地方、ある階級にのみ用いられる特殊な言語表現がそれぞれの章段に集中的に用いられているのも当然でなければならぬ。この事は、伊勢物語中の和

歌がすこぶる民謡性を帯びたものである事、及び、伊勢物語は、部分的にはあるが、その舞台となつてゐる場所によつて類聚的に編纂されている。というよりも「伊勢斎宮に関する物語」「一般に東下りといわれている旅の物語」等が大体、一カ所に集められている事、等から、一応疑つてみなければならぬ。

この疑いを念頭にをいて、伊勢物語を再読してみると、次の諸点に氣附く。即ち、

① 伊勢物語のような男女の恋を主とした物語は、あなたが特定の地方にのみ残されてゐるといつたような性質のものではなく、諸國に地名や人名を変えて伝えられてゐるものと思われる。文中に、稀にしか固有名詞が用いられず、男、女、という一般名詞で書きつゞられてゐるのも尤もである。

② 伊勢物語の各種伝本、異本の存在を考慮に入れ、そこに見られる章段配列の異同を考えに入れても、伊勢物語には、それほど顯著にして明瞭な同系統の物語の魂は見られない。従つて、物語が行なわれた舞台によつて小話が集まつてゐるのは、各地方に残つてゐる民話や説話の集積だからというよりも、もつと朴撰なものであり、作者の幼稚な創作意識もしくは類聚の意図から集められたという方が正しいであらう。

③ 伊勢物語は、全章段を通じて、素朴ではあるが、統一された表現意識に基いたものである。これは古今集と同歌を有する章段について、古今集の詞書と、勢語の地の文とを比較してみると、勢語の地の文の表現意識には統一性がみられる事、及びそこにみられる表現意識は、伊勢物語の全章段に通じる事から証明される。

以上の事から、伊勢物語は、數個の説話群の寄せ集めてはない事が分る。勿論、話の素材や物語のクライマックスを示している和歌は、当時人口に膾炙したものをとり入れたであらうし、物語の内容も云い伝えや聞き伝えが多く導入されているではあるが、その事と、章段配列上の物語の構成とは関連づけられぬのである。とすると、地方地方に残つてゐる方言的言語表現は、章段配列上にあらわれた表現意識とは無関係である。

第二の疑いは、何はともあれ、同一個人に関する話、同一の場所で行なわれた話がある程度一カ所に集められてゐるのは事実であるから、そういう類聚性が、表現上の——も少し具体的に云えば、本稿で問題にしている助動詞や助詞の使用の集中性——をもたらしてゐるのではないかという事である。これは、特定の助動詞については明らかに証明される。例えば、尊敬の助動詞ス、サスは、勢語中、二十七例であるが、その三分の一の九例が七七段から八二段まで

のうち、七九段を除く五章段に用いられている。そしてこの五章段は、惟喬親王その他の貴族の風流みやびの生活ぶりを記している部分なのである。ス、サスの使用の集中性はこの点から説明されつくして十分である。勿論、助動詞というものの性質から考えてこういふ説明が附けられるのは当然すぎる事なのであるが、ここに伊勢物語においては、そのようなには説明し得ぬいくつかの例がある事を知らねばならぬ。今、例を、タリとりにとつて考えてみよう。

伊勢物語の中には、九二例のタリと九五例のりが用いられている。今、このタリとりの分布状態をそれぞれ図示してみると、その分布は、それぞれ数個のグループを作る。即ちタリ九二例の分布は、一二五段中の半数にも満たぬ五三段中に集中され、しかもタリの使用されている章段はお互いに関連性を有している。つまりその五三段は、

1	2	5	6	9	10	14	16	17	19	20	21	24	26	29					
35	38	39	40	45	46	52	55	58	59	60	61	62	65	67	69				
77	78	80	81	82	83	85	87	89	93	95	96	98	99	101	102	103	104	105	107

119 }  
120 }  
というようなグループに分けられるのである。(数字は

段数・印はタリの使用されていない章段を示す)  
り九二例の分布の群は次の如きものである。

2	4	5	6	7	9	14	16	17	18	19	22	23	
32	33	34	37	39	40	42	43	45	46	47	50		
90	92	93	94	96	98	100	101	103	104	105	107	109	110

かくの如く、タリとりは章段によって明らかに集中的に用いられている。そしてこの各群は、物語の内容によって分類したグループの存在とは一応無関係である。

又、この分布の各グループを比較してみると、二十段から三十段まで、三十段から五十段まで、五十段から七十段まで及び、一二十段前後には、タリとりの分布のずれが認められる。この分布のずれは、作者が意識的無意識的に物語のある部分ではタリを多用し、ある部分ではりを多用している事を示している。

ところが、タリの意味は、存在継続、完了、確認など、いろいろに云われている。特に上代の用例においては殆んど「動作の継続中か動作の結果が存続している場合に用いられる。(春日和男先生講義ノートより)」ものであつ

たらしい。リはタリと同じく存在継続の意を表わす。タリ、リの用法の差は、リが動作の現存又は進行をあらわし、タリが動作の結果の存在をあらわすと考える向きが一般である。勿論この場合に、タリにおいて動作が現存又は存続していようが、動作そのものは完全に終了していようが問題ではない。

伊勢物語の全用例タリ、リを検討してみると、タリとリを全く同じように用いた例が多い上、全く同じどころか反対に用いた方が、完了継続の意味の多少によってタリとリを区別するという原理に適っている個所が少くない。かく、タリ、リの意味の違いが問題にならぬとすれば、タリとリの使用のずれは表現意識の上からの、章段配列の意図によるものとしか考えられぬ。

このように伊勢物語の助動詞の使用は、章段の配列が意識的であった事を裏附けるが、これだけでは、助動詞の用法と章段配列の意図性との関連を証明するには、まだ不足である。即ち 伊勢物語の表現意識に、助動詞の使用が、どのような具体的にあらわれているかを見なければならぬ。それは、伊勢物語のような歌物語においては、直接に、文末の口調にあらわれている。

伊勢物語の中に用いられている助動詞では、ケリが圧倒的に多く、五八二という数値を示している。この五八二の

ケリが伊勢物語に特殊な調子を与えている事は確かである。勿論、住ミケリ、行キケリ、帰リケリの如く、動詞に直接結びついて用いられているものが多いが、それと共に、アリケリ、タリケリ、リケリ、ニケリ、テケリ、ナリケリ、ザリケリ、ハベリケリ、ナカリケリというように、助動詞や補助動詞、形容詞等と結びついて多用され、物語の語感に統一を与えている。アリケリ、ハベリケリ、ナカリケリ等は、ケリが結びついているものが、助動詞ではないし、用例数もさして多くはないから、ここでとり上げぬ事にして、今、タリケリ、リケリ、ニケリ、テケリ、ナリケリ、ザリケリについて、その分布を調べてみよう。(第一表参照)

この表を見ると、例えば、タリケリという表現が用いられると、五段から十段ぐらひは続けてタリケリが、リケリ、ニケリ等を圧して用いられ、その後十段ぐらひは、タリケリを全く用いない章段が続く、というような変化がくり返されている。この事は、ニケリ、リケリ、ナリケリ、についても同様に云える。(テケリは用例が少ないので、何とも云えぬが、一段に一例、五段に一例、六段に二例、八三段に二例、八五段に一例、というように、集中的に用いられている事は間違いない。) とういう集中性は、近接章段に関するだけでなく、一つの章段内においても云える

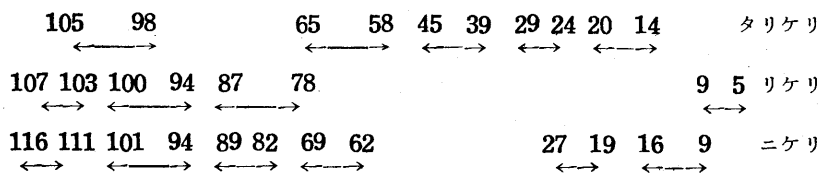


事である。例えば、二四段において、

(前略) ……待ちわびたりけるにいと懇にいひける人に  
今宵あはむと契りたりけるに、この男来たりけり。この  
戸開け給へと叩きけれど、開けで歌をなむよみて出し  
たりける。あら玉の年の三年を待ちわびてたゞ今宵こそ  
新枕すれといひ出したりければ……(中略) ……といひ  
けれど男婦りにけり。女いと悲しくて後に立ちて追ひゆ  
けどえ追いつかで清水のある所に臥しにけり。……(中  
略) ……と書きてそこにいたづらになりにけり。

と、前半がタリケリで統一され、後半がニケリでまとめられてい  
るような場合も多いが、これは、章段の配列とは一  
応無関係であるから詳論しない。

次にザリケリは否定の表現であり、ナリケリは断定の表現  
であるため、内容によって使用を制限され、表現意識の  
統一性だけで片づけるわけにゆかないが、一般に、完了、  
継続をあらわしていると云われているタリケリ、リケ  
リ、ニケリも分布については、タリケリ、リケリ、ニケリ  
の表現している内容に大差がない以上、その使用には、言  
語表現上の創作意識が働らく余地が多いわけである。今、  
タリケリ、リケリ、ニケリの分布を図示してみると、第二  
図の如くなる。



第二図 (字数は段数をあらわす)

つまり勢語一二五段のある部分では、もっぱら語尾がタリケリで止められ、ある部分ではニケリ、ある部分ではリケリが集中的に用いられている事があきらかである。この三者の分布状態には、かなりのグループ性があり、しかもその分布にはずれが見られるのである。

こういう現象が生じているのは、二つの原因が考えられる。即ち、

① タリケリ、リケリ、ニケリの意味、承接は、現在、我々には、同じように把握されるが、その実、大差があったのではないか。

② 物語の内容による類聚性が、間接的に、こういう結果を生じたのではないか。

まず、①の疑問について、私は結論として、少くとも伊勢物語においては、タリケリ、リケリ、ニケリの意味、用法に差別は全くないと思

(註五) う。たゞ意味や内容には区別はないが、結びつく動詞や助動詞におのずから制限が見えている。タリケリ、リケリ、ニケリを従えている動詞の種類は、タリケリ二六、リケリ九、ニケリ三三、合計六八を数えるが、そのうち、三者に共通な動詞は一例もなく、いずれか二者に共通な動詞も非常に少い。タリケリ、リケリに共通な動詞が、「読む」「遭る」「まさる」の三例であり、リケリとニケリに共通な動詞は「給ふ」の一例であり、タリケリ、ニケリに共通な動詞は、「来」「出づ」「居」「知る」の四例である。その上、来タリケリの六例と、来ニケリの七例とだけが均衝のとれた数値を示しているのであつて、他は、「よめりケリ」十三例、「よみタリケリ」一例、の如く、いずれかが圧倒的な数値を示している。この事は、ケリを従えていないタリ、リ、ニの全用例についても云える。

さて、タリ、リ、及びニの原形ヌの上に来る動詞に区別があるだろうか。古来、ツとヌの間では、「ヌは自動詞及び受身形につづき、ツは他動詞及び便役形につづくのが原則のようにおもわれる。」(春日政治博士「西大寺本 金光明最勝王経古点の研究」)といわれて来たが、それも、宣長の如く「つる」「ぬる」どちらでもよいものもあり、又「ける」「たる」にて代用可能なものも多い(玉鬘)とい

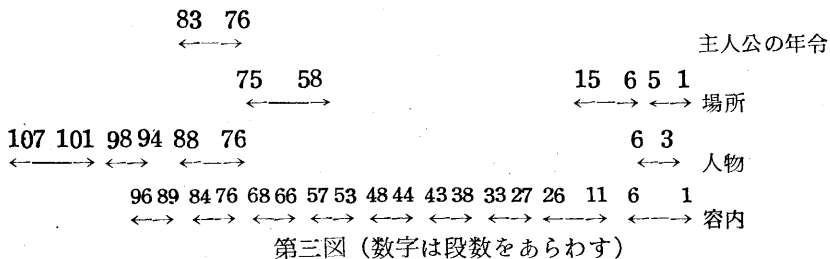
う程度の大体のものである。元来、タリとリの上に来る動詞には区別はなく、まして、タリ、リとヌの上に来る動詞の区別もない。従つて、ここにみられる一種の制限は、タリ、リ、ヌそのものの性質によるものではなく、この物語だけにみられる特殊なものである事が分る。竹取物語、土佐日記中の、タリケリ、リケリ、ニケリの上接動詞の調査からも、この制限は、伊勢物語に特有のものである事が証拠づけられる。

以上述べたところから、タリケリ、リケリ、ニケリの使用にみられる集中性は、タリ、リ、ヌの言語学的性質に由来するものではなく、この物語の著者の言語意識―又は、創作意識といつてもよいもの―に由来するものなのである。

次に②の疑問については、先ず、物語の内容による類聚性というものも、極めて漠然としたものであつて、明瞭な形を認める事は不可能である事を挙げねばならぬ。今、物語の内容によつて何らかのグループ性が見られるものを集め、図示してみると、第三図の如くなる。前掲第二図と、第三図を比較してみると、内容による類聚性と、タリケリ、リケリ、ニケリの分布は無関係である事が、分るであらう。

以上、考え得る二つの原因が否定される以上、タリケ





リ、リケリ、ニケリの分布のずれは、明らかに、表現意識—文末の口調を整え、全体にある程度の特徴的語法の流れを与えようという言語意識のあらわれに他ならない事が、おのずから明らかにされたわけである。

同様の手続きで処理してみると、接続助詞のニ、ヲについて、同様の事がいえる。即ち、接続助詞、ニ、ヲは、全く同じ様な用法で用いられる事があるが、伊勢物語の中でもそういう用例が多く、それが、近接章段において、ある程度、統一的、集中的に用いられているのである。又、接続助詞バについても、同様の類聚性が明らかにされた。

以上の事から、私は、言語表現上からも、伊勢物語の章段配列には、作者（もしくは作者群）の綿密な創作意識、表現意識が、作用

していると証明するものである。伊勢物語の作者は、歌を中心とした百数十個の小話を、一見、「昔ありける男」の一代記に見えるが如く、内容的に組みたてたのと同時に、言語表現の上からも、統一性、類聚性を意図して章段配列を行い、物語を構成しているのである。

註一、福田良輔先生「勢語中の疑問の歌三首」（言語と文学第一

輯所載）昭和十年参照

ロ、倉野憲司博士「伊勢物語の研究」（日本文学講座3所載）

昭和九年参照

註二 ここにあげた数値は、定家本系統、天福本（池田龜鑑博士の「伊勢物語に就きての研究」校本篇の底本）によるものである。他の系統の異本や、小式部内侍本、皇太后宮越後本の如き特殊な異本にのみ存在する残存章段を加えれば、もっと増加した数値を得られる。伊勢物語の伝本研究の現在の段階においては、勢語が現在の形に構成されるに至った経路を明確にしないで我々は、残されている一二五段をそのままの形で処理するより他ない。私は、現存の諸伝本の章段配列の比較研究の結果、現存諸本の章段配列には、さして問題とすべき異同が認められないという結論に達している。

註三 伊勢物語の民謡性については、福田良輔先生によって論及されている。「伊勢物語の民謡性」（国語国文六卷一号所載）を参照されたい。

註四

この数値は、地の文の中だけのものである。和歌における言語表現と地の文の言語表現とは自ら異なるわけであるから同日に論ずる事は出来ない。今後本稿においては、特に断らない限り、地の文の中の助動詞だけを問題にする。

註五

リ、タリがそこに含まれる存在、継続の観念の多少によつて区別されるが如く、ツ、ヌも同様に区別される。「又は単に動作の完了をあらわすとし、ツは完了と共にその結果を予想するものである」(小林好日博士、国語国文法要義)という説に従うのが妥当のようである。タリ、リ、ヌの間には、存在、継続の意の多少という問題があるだけで、それ以上、はっきりした区別をもつて用いられてはいないのである。

御 願 い

- 移動、住所変更等がございました時は、すみやかに、お知らせ願います。
- 本誌運営上、困難をきたしておりますので誌費未納の向きは何とぞ御配慮をお願いいたします。
- 次号原稿は昭和三十三年六月末日締切で、九月発刊と予定いたしております。奮って御投稿下さい。